

民生環境水道常任委員会行政視察報告書

飯 島 一 弘

○愛知県刈谷市

高齢者支援の取組について

【所 見】

まず、刈谷市、現在までの生い立ちであるが、明治39年合併から昭和25年までに原型の刈谷市が構成、その後も幾多の合併を経て現在の人口約15万2千人の刈谷市が形成されている。したがって、人口規模は本市とやや同等と考えて差し支えないと思われる。そこで、今回の視察目的である高齢者支援の取組についてであるが、見守り的な対応、対策は本市が既に行っている取組に近いものも見受けられるものの、宅食サービス事業においてはいくつかの驚きと疑問点が伺えた。

まず驚いたのは、平成8年4月のスタート以来利用者負担額300円を一度も変更していない点である。つまり、1996年にスタートしその9年後の2005年の刈谷市65歳以上の人口は18,910人であったが、2020年には31,028人と大幅に増加している。したがって、本サービスを希望する人口も当然増えていると予想させるが、負担金の据え置きは相当の行政努力があったものと驚愕でしかない。

そこで、今後の疑問点として2040年には刈谷市65歳以上の人口が4万を超えると推測されているが、そこに至るまで、特に近年の急激な原材料、光熱費等の高騰に対処していけるのかと思われたので質問を試みたが、「努力します」とだけで、具体的な対処法、計画等の回答は得られなかった。

【総 論】この事業の最大の目的は見守りであることは変わらないが、本市のヤクルト配布事業等とは異なり、これを推進することにより、食生活が規則正しくなった・食欲が出てきて体調が良くなった等々、高齢者の健康面に大きく寄与しているところにある。長い目で見れば、健康寿命が延び、高齢者福祉の根幹にも波及効果が望めると期待が膨らむ。本市も現状を考えられるいくつかの問題点を今から整理し、解決策が見いだせるのであれば、積極的に導入すべきと考える。

○愛知県豊田市

衛星画像とAIを活用した漏水対策について

【所見】

豊田市と言えどもどうしても「クルマの町」のイメージが優先するが、現状このイメージは確かに豊田市の核にはなっているものの豊田市の生い立ちを知り、たまたまではなく、なるべくしてなっているということに確信を持った。昭和34年1月に挙母市から豊田市に変更以来、近隣市町村との合併により地域を拡大、平成10年4月には中核市に移行、また平成17年4月さらに6町村と合併し現状の基礎が確立された。現在人口は約42万人で栃木県では人口約51万人を要する宇都宮市とその活気から近い印象を持った。

先に「クルマの町」が核ではあるが、現状に至るまで偶然ではなく、なるべくしてなっていると述べたが、昭和51年の昭和恐慌以来不振に喘いだ折、当時の中村寿一町長がいち早く豊田の工場誘致に乗り出し、町議会と協力、力を結集してこれを成し遂げる。ここを全ての基礎として、観光・福祉・教育等常に先進的に行政改革を断行、まちづくり全てにおいて積極性が感じられ、今回の視察目的である衛星画像とAIを活用した漏水対策もこのことが多分に影響しているものと思われた。

本市も既に同様の計画を有しているので現状先を行っている豊田市の取組には大いに興味を持って説明を拝聴したが、衛星画像解析の分野では最先端の電磁波（Lバンド）を駆使、水分・水道水の判別を行い、調査範囲の絞り込みにより漏水調査を行ってきたが、課題も多く、そこでJAXAベンチャーと連携して宇宙ビックデータから高精度で漏水可能性区域を判定する実証実験を開始、これがAI漏水調査の核であるとのことで、私的ではあるが、この新たな試みには大いに興味をそそられた。

結論から言えば将来のコスト面・的中率30%弱という現状等問題点はあるが、以前より私的に興味を持っている。スペクトラ（電磁波を波長で分けたもの）、これは分光によって得られた光を分析することにより、様々な天体の構成・物質の種類や状態を調べることができるもので、天体分光学と呼ばれており、将来これらの技術を導入することができれば、的中率も飛躍的に改善されるのではないかと高揚さえ覚える内容であった。近年の宇宙開発分野では、広くは量子力学まで解明・開発されれば将来日常的に利用できる分野が多分に存在する。さらにエンタングルメントに興味を深くした視察であった。